

【省察するスクールリーダー】 第36回

教育実践の山脈を描く①

—実践研究 教師のライフコース—

大阪教育大学名誉教授 大脇康弘



1. スクールリーダープロジェクト

スクールリーダーの「学び場」を創ることをミッションとして、スクールリーダープロジェクト(SLP)を20年間組織してきた。主要な取り組みは、A.スクールリーダーフォーラム、B.夜間大学院 教職大学院、C.スクールリーダー研究会の三つである。

スクールリーダーフォーラムは、大阪教育大学が大阪府教育委員会・大阪市教育委員会とコラボレーションした事業で、福井大学教職大学院、鳴門教育大学教職大学院と連携協力して取り組みを重ねた。スクールリーダー、指導主事、教育研究者の三者約100名が大阪教育大学に集い、学校づくりの実践を報告し・省察する作業を核とした取り組みである。

大阪教育大学の夜間大学院スクールリーダーコース、連合教職大学院学校マネジメントコースは校長・教頭をはじめとするスクールリーダーが「働きながら学び」、実践研究に取り組み修士論文(実践研究報告書)を仕上げてきた。

スクールリーダー研究会は夜間大学院 教職大学院の修了生および関係者が実践研究を持続し研鑽する場として組織され。研究大会を開催し研究紀要を刊行してきた。

このフォーラム、大学院、研究会は各々目的・内容・組織・規模が異なる独自の取り組みであるが、「学び場」を創る基軸に、①出会う・交わる・協働する、②目標共有・実践交流・省察と創発、③理論知と実践知の対話をすえて持続している点は通底しており、相互に影響し緩やかに関係づけられて、スクールリーダーの学び場を構築してきた。

出版刊行物として『スクールリーダーフォーラム

報告書・冊子』『学校教育論集』『大阪の学校づくり』『スクールリーダー研究』(以上、各年度版)が、関連書籍として『ひらく 教師の学習コミュニティー学習するスクールリーダー』『つくる 教師の学習コミュニティー大学・学校・教育委員会のコラボレーション』『若手教師を育てるマネジメント』(ぎょうせい)がある。

このスクールリーダーの「学び場」を創る事業は日本教育経営学会「実践研究賞」(2回)を受賞した。受賞題目は「スクールリーダーフォーラム事業の持続的实践」(2012)「夜間大学院のスクールリーダー教育の实践」(2017)である。

スクールリーダープロジェクトは2001年度にスタートアップし、2020年度に事業は閉じられた(詳細はHP参照。

<https://schoolleadersproject.p-kit.com/>)。

現在はその継承事業として、スクールリーダー有志が教師のライフコースの実践研究に取り組んでいる。これから数回にわたってこの取り組みについて報告したい。

2. 教育実践の山脈を描く

スクールリーダープロジェクトは、学校づくり実践を対象に、フォーラムのラウンドテーブルで「語り・聞く」協働作業を通して省察し、大学院では実践研究として認識枠組を明示して分析考察してきた。続いて取り組んだのが、教師個々人の教育実践・学校づくり実践の軌跡を明らかにする実践研究である。これは、教師のライフコース研究をふまえて「実践研究：教師のライフコース」という研究領域を開

拓することになった。

これまで教師のライフコース研究は、教師の生き方の軌跡を辿り、入職・成長・転機・退職の過程を明らかにし、専門的力量と教育実践スタイル、それを支える信念の形成について考察してきた。それは教育政策・教育運動との関係、社会的歴史的背景を視野に入れて、個人として集団としてのライフコースを認識することに努めてきた。

教師のライフコースは、①力量形成、②キャリア形成、③教職アイデンティティ形成の三角形として把握できる。教師のライフコースは個人としてコーホート（同年齢集団）として多種多様であるが、教師の a. 力量形成 b. 教職経験（時代経験）の共通性と多様性を実証的に明らかにしようとするものであった。これは教師のライフコース、ライフストーリー、ライフヒストリーと研究の潮流を形成しながら、教師教育研究に広がりと深さをもたらしてきた。

私たちはこの研究成果をふまえて、教師自らが教育実践をしっかりと描くこと、すなわち教育実践を「リアルに具体的に記述すること」を基軸にすえて、教師のライフコースを「省察・探究・再構成」する方法を探究してきた。

それは第一に、教師が自らの「教育実践の軌跡と生き方」(ライフコース)をロングスパンで振り返り、教職経験を大局的に把握しそれを意味づけ再構成することを目的とする。

第二に、各キャリアステージにおいて教育実践の「塊り」を取り出し、「テーマとストーリー」を浮かび上がらせる形で教育実践を「リアルに具体的に記述する」ことである。

第三に、各キャリアステージにおける教育実践の「塊り」(テーマとストーリー)を「つなぐ」形で、教師のライフコースの軌跡と特徴に切り込むものである。教育実践の山脈(やまなみ)を描くのである。

第四に、スクールリーダーを対象とする研究では、キャリアステージは若年期、中堅期、教頭期(指導

主事期)、校長期の四期を原則とする。

第五に、教師自らが教育実践、学校づくり実践を「省察・探究・再構成」し、記述することである。つまり、教育実践者が主体となって取り組む「当事者研究」である。

第六に、教育研究者が教育実践者の「当事者研究」を枠づけると共に、助言・支援する。その意味で、教育実践者と教育研究者の協働実践研究といえる。

以上のように、「実践研究：教師のライフコース」は、教師自らが「教育実践の山脈を描く」実践研究に取り組み、記述するところに特徴がある。

これまでの教師のライフコース研究は、教育研究者が教育実践者からその教育実践と生き方を聴き取り、実践観察、資料分析など実証的方法で、教師のライフコースを認識し再構成する。研究者が実践者と協力関係を作りながら研究論文として論述するのである。

「実践研究：教師のライフコース」の独自性は、教育実践者自らが教育実践を「リアルに具体的に記述する」ことを基軸に「教育実践の山脈を描く」ことを通して、自らのライフコースを「省察・探究・再構成」することにある。当事者である教師が教育実践の「物語を紡ぐ」のである。この教育実践者の当事者研究を教育研究者が枠づけ、助言・支援する協働実践研究として取り組まれるのである。

この「実践研究：教師のライフコース」の意義と可能性、困難と限界については次回以降で述べたい。

【プロフィール】大脇康弘（おおわき・やすひろ）

教育経営学・教師教育学専攻。スクールリーダー教育の実践で日本教育経営学会実践研究賞受賞。編著者に若手教師を育てるマネジメント』『学校をエンパワーメントする評価』（ぎょうせい）『「東アジア的教師」の今』（東京学芸大学出版会）。<https://schoolleadersproject.p-kit.com/>

【省察するスクールリーダー】 第37回

教育実践の山脈を描く②

—実践研究 教師のライフコース—

大阪教育大学名誉教授 大脇康弘



1. 代表的な教師のライフコース研究

教師のライフコース研究は1970年代末にスタートし、ライフヒストリー、ライフストーリー研究へと研究視角や研究方法を多様化してきた。その主要テーマは教師の発達と専門的力量的形成にあった。ここでは代表的な研究を単行本3冊に絞って紹介した上で、「実践研究 教師のライフコース」の特徴を明らかにしたい。教師のライフコース研究はこの40年間に多数の単行本が出版され、研究論文が発表されてきた。研究の分水嶺となった単行本を上げるとすると次の3冊になる。

A. 稲垣忠彦・寺崎昌男・松平信久編『教師のライフコース—昭和史を教師として生きて』東京大学出版会、1988年、330頁。B. 山崎準二『教師と教師教育の変容と展望—結・教師のライフコース研究』創風社、2023年、617頁。C. 高井良健一『高校教師のライフストーリー—高校教師の中年期の危機と再生』勁草書房、2015年、464頁。

各々の研究テーマ、研究対象（人数、属性）、研究方法論（ライフコース、ライフヒストリー、ライフストーリー：質問紙調査、インタビュー調査、実践観察調査）などを簡潔に整理しよう。

A. 稲垣忠彦他編著のテーマは「ライフコース・リサーチにもとづく教師の成長と専門的力量的形成の研究」と資料集に題されている通り、教師のライフコース研究を切り拓く8年間の共同研究成果である。1931年（昭和6年）長野県師範学校卒業生（男子教師）の教職経験40年間（1931年～1970年）を総合的に分析考察した。生存する教師経験者71名（有効回収率58.7%）のアンケート調査と、36名のインタビュー調査のデータを分析し、被教育体験、師範学校教育、教師最初の10年、力量的形成における学校の役割、管理職期の特徴を量的データと事例から多面的に描こうとしている。そして、戦前、

戦時下、戦後の時代経験と教職経験を交錯させて記述した歴史的社会的研究ともいえる。特定地域の同一卒業生のコーホート（同年齢集団）という焦点化された対象から得られた豊富なデータ・資料は、稲垣忠彦グループのネットワークによるものである。この研究は力量的形成の契機となる要因、教師の転機などを実証的に明らかにし教師教育研究の基礎となった。

B. 山崎準二著は「ライフコース・アプローチに基づく教師の発達と力量的形成に関する研究」と総称する著書3冊（正2002年・続2012年・結2023年）の最終報告書である。A. 稲垣忠彦他編の研究テーマと研究方法を継承し拡大深化を図る研究書である。著書が勤務した静岡大学教育学部卒業生（1952年～2014年卒業）で公立小中学校教師を対象とする40年間に及ぶ息の長い研究成果である。卒業生コーホート（Graduate Cohort:GC）を5年間隔で設定し、第1GC～第13GC（1952年～2014年）を対象に質問紙調査（第1回～第7回）を重ねた。有効回収総数は7468名（各回の有効回収率32.8%～63.1%）である。同時に各GCから1～2名を選定してインタビュー調査を重ねている。各卒業生コーホート（GC）の量的データと事例データを併用して分析考察することによって総合的に把握しリアルな実態に切り込むことに挑んでいる。そして、こうした実証的研究をふまえて教師教育政策を検討し、選択的変容型発達観、自己生成型・文脈状況依存型力量観、様々な領域にわたる要因を推量し最適な解を追究する専門性観、教師が育つネットワークの整備観など7つのオルタナティブな改革案を提起している。

C. 高井良健一著は高校教師4名を対象にしたライフヒストリー研究からライフストーリー研究へと到達した研究成果である。教師のライフストーリー

を聴き取り辿る作業と、教職アイデンティティを支えている物語とそれを支えている枠組自体を問い直す作業にまで挑む長期にわたる取組である。研究対象が高校の男性教師（1950年代半ば～1960年代前半出生）であり、担当教科は数学、地理、社会、社会と社会科に偏る一方、設置主体は国公私立とばらつき、地域も一様ではない。これは著者が出会い、ライフストーリー研究の「語り手―聞き手」の関係を築き相互作用を重ねることができた教師である。この研究はライフヒストリー、ライフストーリーの研究方法論を緻密に検討する一方、教師の中堅期からベテラン期への移行を中年期の教職アイデンティティ危機と捉え、事例研究からその危機と再構築の実相を剔出するところを主テーマにしている。前半では教師のライフストーリーを教職経験、時代経験に沿って辿り、後半ではライフストーリーとその枠組自体を問い直すことで新たな見方・意味づけを探究する。その際、支配的な物語（学校文化と自己物語の二重性）を把握しつつ、ライフストーリーの語りの中にもう一つの物語を掘り挙げて、支えとする物語を編み直すという相互作用を行うのである。三つの物語概念によって、中年期の教職アイデンティティの危機と再構築を語り直す作業が本書の肝である。

以上、代表的な3冊の単行本に絞って紹介したが、これと比較する形で私たちが取り組んでいる「実践研究 教師のライフコース」の特徴について述べよう。

2. 実践研究 教師のライフコース

「実践研究 教師のライフコース」は、教育実践者自らが教育実践を「リアルに具体的に記述する」ことを基軸に「教育実践の山脈を描く」ことを通して、自らのライフコースを「省察・探究・再構成」することを目的としている。それは教師の仕事と生き方（ライフコース）をロングスパンで把握する独自の研究領域である。教師生活は40年近くに及ぶが、スクールリーダーの場合は若年期、中堅期、教頭期、校長期の四期を原則として設定する。各時期の教育実践を「塊り」として取り出し「リアルに具体的に記述する」こと、そのためには教育実践を「コンセプトとストーリー」を持つ物語として再構成するこ

とが必要不可欠である。

「実践研究 教師のライフコース」の研究主体であり研究対象者は、スクールリーダー研究会有志であり、次のような特徴を有している。第一に、スクールリーダー経験者であり、校長、教頭、指導主事として学校組織者として学校づくりの経験を持っている。第二に、スクールリーダー研究会などで学校づくりの実践研究に取り組み、研究発表、論文執筆に取り組んでいる。第三に、多くが大阪教育大学夜間大学院・同連合教職大学院で2年間学び、実践研究論文（修士論文、実践課題研究報告書）を執筆してきた。第三に、教職経験は40年前後で、年齢層は60歳代、70歳代である。第四に、大阪府をはじめとして兵庫県、奈良県、京都府の関西地区で教職経験を積んできた。一方で、校種、担当教科、性別、地域は多様である。いずれも教育実践者として学校組織者としての取り組みはもちろん人物は个性的で多様である。総じて、教育実践者と実践研究者との二重性のなかで葛藤を抱えながら「学び続ける教師」として生きてきた点が共通しているのである。

「実践研究 教師のライフコース」の取り組みは、私たちスクールリーダー研究会有志にとってたやすい課題ではなく乗り越えるべき課題である。実践研究者の属性は教育実践者から学校組織者への道を歩んだ小学校教師5人、中学校教師1人、高校教師4人であり、内1名は特別支援教育を実践テーマとしている。この10人は、実践研究企画者の大脇が長年の交流を通して、指導力と組織力が高く、実践を省察できると認識している教師である。今回はこの実践研究を支える認識論について述べよう。

【プロフィール】大脇康弘（おおわき・やすひろ）

教育経営学・教師教育学専攻。大阪教育大学教授、ペンシルベニア大学客員研究員、関西福祉科学大学教授を歴任。大阪府中高一貫教育研究会議座長（能勢地域連携型中高一貫教育）、大阪府立今宮高校（総合学科）、神戸市立六甲アイランド高校（総合選択制高校）の学校改革に関わる。編著に『若手教師を育てるマネジメント―新たなライフコースを創る指導と支援』ぎょうせい。

【省察するスクールリーダー】 第38回

教育実践の山脈を描く③

—実践研究 教師のライフコース—

大阪教育大学名誉教授 大脇康弘



1. スクールリーダーの実践研究

21世紀に入って教育学研究における理論と実践の関係、研究の実践性・臨床性が強く問われるようになった。とりわけ全国の教職大学院の教育では理論と実践の「架橋・往還・融合」が基軸に据えられ、カリキュラムの標準化・統制化が図られた。筆者はこうした政策動向に向き合いながら、スクールリーダーの実践研究の道筋を探究してきた。筆者の教育実践の内実と理論的基盤については論稿にまとめているので^(注)、ここでは簡潔に整理しておきたい。

大阪教育大学のスクールリーダー教育は、夜間大学院スクールリーダー・コース（その前身を含む）とその再編転換である連合教職大学院学校マネジメントコースで取り組まれた。ここではスクールリーダー教育の到達目標として学校づくりの実践研究を提示し、その認識論として「理論知・実践知対話論」を構築して、スクールリーダーに登るべき山脈と道筋の「羅針盤」を示してきた。その基本的考え方と教育的背景は次の通りである。

第一に、夜間大学院に毎年度スクールリーダーが継続的に入学し、修士論文に取り組むようになったことである。入学者総数は40名を超え、校長・教頭、指導主事、ミドルリーダーが大半を占めていた。

第二に、修士論文を学術論文の形式から実践研究論文の形式に転換したことである。学校づくり実践を考察する形式には、学術論文、実践記録・報告、実践研究論文がある。実践研究論文は自分の学校づくり実践の内容・組織・過程を省察し、課題解決と意味づけを行うのである。その際、理論的認識枠組を取り込み、先行実践事例と比較考察することを通して、実践事例の相対化・一般化を図るのである。これは第三の道で、当時開拓途上にあった。

第三に、スクールリーダーが、実践者としての実践的・状況対応的思考と研究者としての理論的・実証的思考とを対話させる「研究的実践者」「実践的研究者」として生き抜く道を選択したのである。両

者の対話においては矛盾・葛藤を引き受けながら、ハイブリット型思考を大切にするのである。ここではスクールリーダーの実践的知見を生かし深めること、大学院の研究的知見を学び生かすこと、そして両者の化学反応を引き起こす可能性を探究するというスタンスが大切にされている。この営為は困難ではあるが、発展性・創発性を秘めた第三の道である。これは理論と実践の「架橋・往還・融合」という認識枠組を相対化し再構成するものとなる。

2. 「理論知・実践知対話論」の構築

実践研究は、実践をテーマ化し、その内容・組織・過程を記述し、実践の課題解決と意味を明らかにすることと定義した。学校づくり実践の実践研究の成果である「実践研究論文」には次の4要件が求められる。①学校づくり実践をテーマ化する（明確な問いを立てる）②実践の方法と過程を記述する（葛藤や課題も取り出す）③自己の役割と活動を位置づける（個人と組織を関係づける）④学校づくりの課題解決とその意味を考察する（個別性と一般性に論及する）。この基本要件を満たすためには、次の取り組みが必要であり効果的である。⑤主要な先行研究（学術論文）を検討し、テーマを焦点化する（テーマを絞り込む）⑥比較対象事例を選定して、自己の実践と比較検討する（分析枠を作成して事例比較する）。

スクールリーダーの実践研究を導く認識論として「理論知・実践知対話論」を構築し、私たちの足場を固めてきた。この認識論は理論知、実践知、実践研究の三次元において各々4段階のレベルを仮設して論理構成したものである。実践知は実践的知見・知恵であり、実践者の経験と実践感覚を整理したものである。実践性・具体性を志向するもので、個人や学校の状況を反映するなど特定の社会的文脈に規定されている。理論知とは現象を説明し、予見する理論的命題と研究方法に関する知識技術である。体

系性・実証性を志向し、研究者集団の専門性に基いて成立している。

第一に、実践知の規準として、a. 実践の整理 b. 実践の主題化 c. 実践の再構成 d. 実践の理論化という4段階を仮設する。各段階でキーワードとなるのが、a. 実例・エピソード b. 物語知：コンセプトとストーリー c. 意義づけ、見直し d. 持論 or 実践科学である。第二に、理論知の規準として、a. 理論の学習 b. 理論の内面化 c. 理論の再構成 d. 理論の構築という4段階を仮設する。各段階のツールとして、a. 概念・認識枠組 b. 研究方法論 c. 批判的思考 d. 理論構成が上げられる。第三に、理論知と実践知の連関として、a. つなぐ、b. 往復、c. 対話、d. 統一（以上を「対話」と総称）という4段階を仮設する。両者は実践知が理論知に支えられ、広がりや深まりをもって次の段階に移行する関係で、実践研究が発展深化する。この4段階は単線的に進行するのではなく、スパイラル的に展開し、停滞・後退・跛行のジグザグがみられる。第四に、実践研究は、理論知と実践知が連関する中で、a. テーマの掘り下げ、b. 認識枠組の形成、c. 実践の相対化、d. 内容・形式・方法論の確立という4段階を仮設できる。実践研究では「理論の意識化と実践の対象化」をスパイラル的に展開深化させることがカギとなる。以上のことを簡略に図式したのが、次の図である。

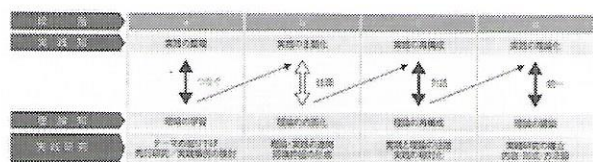


図 理論知・実践知対話論（簡略版）

3. 「実践研究 教師のライフコース」の課題

夜間大学院におけるスクールリーダーの実践研究は修士論文としてまとめられ、その再構成版が『学校教育論集 各年度版』（2005～2018年度）として刊行されている。修士論文が実践研究の起点となって、大学院修了後は、『スクールリーダー研究』第1号～第13号（2008～2020）に査読論文として掲載されている。

学校づくり実践の実践研究に取り組んだ土台の上に、スクールリーダー研究会有志に呼び掛けて「実践研究 教師のライフコース」に挑戦してきた。これは教育実践者自らが各時期の教育実践を「テーマとストーリー」を持つ物語として再構成し「リアル

に具体的に記述する」ことを基軸に、「教育実践の山脈を描く」ことを通して、自らのライフコースを「省察・探究・再構成」することを目的としている。これの基本は「プロジェクト『教師のライフコースの実践研究』要綱」にまとめられている。要綱の概要は連載36回、37回で述べたが、留意点として次のように記載している。a. 自分のための記録、思い出、振り返りにしない。b. 教育実践の意味づけは、必要最小限に止める。時期ごとには行わないで、文末におく。c. 教育実践のテーマが絞られているか、それを「リアルに具体的に」描けているか、これがプロジェクトの肝である。ここには教師の教育実践における焦点化・重点化を図る一方、教育実践の記述・説明について抑制と禁欲を喚起している。

その理由は、教師の自己形成史、教育実践史の試みが個人の経験、物語、説明を並列的・羅列的に記述することに陥り、実践事例の対象化・一般化がきわめて困難であるからである。実践知を深めようとしても理論知への取り組みが弱く、両者の対話・連関がほとんどないからである。先行論文や先行事例に学んで、1実践1事例に絞り、テーマとストーリーを明確にして、実践を物語として再構成する道筋が必要不可欠なのである。

スクールリーダーは実践研究に取り組むことを通して、実践を省察し再構成すると共に、教職アイデンティティを再定義することになる。その意味で、実践研究は新たな実践世界を拓く扉となりうるのである。

（注）日本教育経営学会編『教育経営における研究と実践』（第3章 教育経営研究における理論知と実践知）、学文社、2018。

【プロフィール】大脇康弘（おおわき・やすひろ）

教育経営学・教師教育学専攻。大阪教育大学教授、ペンシルベニア大学客員研究員、関西福祉科学大学教授を歴任。日本教育経営学会理事、日本教育制度学会理事、日本高校教育学会理事を歴任。編著書に『学校を変える授業を創る』『学校評価を共に創る』（学事出版）『若手教師を育てるマネジメント』『学校をエンパワーメントする評価』（ぎょうせい）『「東アジア的教師」の今』（東京学芸大学出版会）。<https://schoolleadersproject.p-kit.com/>